

【実践報告】

2年後のプロジェクト型インターンシップにおける 参加学生と教員の振り返り

今後のキャリア教育の方向性を踏まえて

金森 敏

東京家政学院大学現代生活学部

要旨

本稿は、『平成 27 年度プロジェクト型インターンシップ報告書』に、現在 3 年生となった学生へのヒアリングを加筆し、まとめたものである。加筆した内容は次の 2 点である。1 つは課題設定に至る学生の苦勞である。もう 1 つはプロジェクト型インターンシップを終えた 2 年後に、参加学生にヒアリングを行ったことである。加えて、教員自身も当時の振り返りを行い、今後のキャリア教育についてまとめた。

キーワード：長期インターンシップ，課題解決型授業(PBL)，キャリア教育，追跡調査
振り返り

1. はじめに

「プロジェクト型インターンシップ」は、岐阜大学の全学共通教育科目における授業の 1 つである。「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」において、「岐阜大学長期インターンシッププログラム」を実施したことから始まっている。平成 25 年度はパイロットスタディとして、平成 26 年度は全学共通教育科目における「プロジェクト型インターンシップ」として単位認定され、今日に至っている。

本授業の特徴は、長期インターンシッププログラムとして、企業や団体から与えられた課題を、チームで取り組むことによりその問題を発見し、課題を解決する約半年間の PBL 型 (Project-Based Learning) の教育プログラムである。具体的には、企業・団体での継続的な通いを原則とせず、参加学生が企業で実習する期間は、原則 1 週間 (5 日間) 程度である。この実習を踏まえた後に、後期の授業において課題解決に向けた授業 (アンケート、フィールド調査等) を行うものである。

2 年後のプロジェクト型インターンシップにおける参加学生と教員の振り返り

本授業の目的は、岐阜大学が目指す基盤的能力である 3 つの力（進める力、伝える力、考える力）を育成することである。平成 25 年度、平成 26 年度における授業結果では、参加した学生の基盤的能力は高まり、学生の社会に対する意識や成長などが見られた。

しかしながら、次のような課題点も見受けられた。それは、①各企業が提供する課題のレベルが異なっており、結果としてチームによる学びの内容にバラツキが生じたことである。また、②基盤的能力である汎用的能力（ジェネリックスキル）を高めることに主眼が置かれ、インターンシップの本来の目的である働く意識やマインドを醸成するにはあまり至らなかったことである。

上記の課題を踏まえ、平成 27 年度においては、中日新聞岐阜支社の協力の下でプロジェクト型インターンシップを行った。中日新聞岐阜支社のみであったので、提供された課題にバラツキはなかった。加えて、働く意識やマインドを醸成するプログラムを試験的に導入し実施した。

具体的には、働く意識やマインドを醸成するプログラムとして、プロジェクト型インターンシップに協力してくれた社会人に、働くとは何か等ヒアリングを行った。ヒアリングを行うことで、学生が考えている働くことのイメージと社会人が考える働くことのギャップが明らかになった。

2. 平成 27 年度プロジェクト型インターンシップ

2. 1 プロジェクト型インターンシップの特徴と参加学生について

平成 25 年度と平成 26 年度におけるプロジェクト型インターンシップでは、企業や行政から与えられた課題がまずあり、その課題に答えるといったものであった。実際、中日新聞社では、新聞カフェを広め盛り上げるためにはどうすればよいかといった課題であった。大垣共立銀行では、近年の女性のライフスタイルの変化、キャリア志向をふまえ、大垣共立銀行はこれから女性に対してどんなサービス・商品を提案していくべきかといった課題であった。

平成 27 年度におけるプロジェクト型インターンシップでは、課題そのものではなく、課題を学生自らが考え、それに答えるというプロジェクトであった。課題を与えられ、それらを解決することでさえ大変なのに、平成 27 年度のプロジェクト型インターンシップでは課題そのものをゼロから作り出し、その課題を学生自ら解決する必要があった。そのためプロジェクトの成功も学生が決めることになった。

なお学生が決めたプロジェクトの成功基準は、2016 年 1 月 16 日に開催した最終成果報告会に来てくれた学生の 7 割以上がアンケートで、「山県市に行きたい」と答えたら成功と定義した。実際、最終成果報告会に参加した 24 人の学生のうち①大変行きたい 46%、②行きたい 54%となり、本プロジェクトは成功として終えることができた。

一方、本プロジェクト型インターンシップの参加学生は計 7 名であった。その内訳は男

子学生1名・女子学生6名、学年は3年生2名・2年生1名・1年生4名、学部は地域4名・教育1名・工学1名・応生1名であった。

2. 2 課題を見つけるまでの苦労

結論から先に書けば、参加学生は「若い人に来てもらうためにはどうすればいいか提案しなさい（若い人＝岐阜大学生）」といった課題を設定した。しかしながら、上記の課題を設定するまでに、学生は多くの苦労を経験した。このことは、以下2名の学生（当時3年生）の感想からも分かるであろう。

このプロジェクトでは、課題を見つけるまでが本当に大変でした。プロジェクトが進んでいるのかいないのかも分からないし、間に合うのか、最終的に形になるのか、本当に先が見えませんでした。しかし、話し合いや現地調査を何度も重ねて設定した、「若い人（岐阜大学生）を呼び込むためにはどうするか」という課題は、そのおかげで納得のいく課題になり、プロジェクトの成功につながったのだと思います。効率のよさを重視することはもちろん大事だとは思いますが、回り道をすることで自分たちのプロジェクトは確実に濃いものとなったと思います。（地域3年）

私はこの授業を通して一番感じたことは、“作り出す”ことの難しさです。与えられた問題や課題の解決方法を見つけることが大変であることは確かです。だけど、まず何が問題であるか、ということを探し出すことはもっと難しいことであるのだと身を持って感じました。実際にプロジェクトの半分は課題発見のために時間を費やしました。私はいつでも、目的をはっきりさせて、そこに向かうためのアプローチを考えてきました。だから正直始めは何のために、何をしているのか、わからないまま活動をしていました。だから課題が決定した時は、まだ解決していないのに不思議な達成感がありました。これはこのプロジェクトを通して初めて味わった感覚です。（地域3年）

プロジェクト型インターンシップが始まり山県市を訪れた際には、次の2つの課題があった。1つ目は、山県市は子育て支援に力をいれているので、子育て支援で地域活性化をするという案であった。2つ目は、伊自良湖イベント、林業、イチゴ狩り、栗、B級グルメなど観光で地域活性化をするという案であった。

地域活性化というキーワードは魅力的であったものの、担当教員は学生がプロジェクトそのものを「自分事」として捉えているのではなく、どこか「他人事」のように捉えているように感じた。そこで担当教員が「自分たち目線で、自分たちでできる」ことを意識するように促し、ポストイットを使ってアイデア出しから始めることにした。

なお、アイデア出しとして使用したポストイット枚数は166枚で、ポストイットに書かれた内容は「看板をつくる、PRが少ない」、「若者が集まる場所がない」などであった（図

1 参照)。

図 1 ポストイットによるアイデア出しと課題設定



最終課題を設定するに至るプロセスは、「①山県市に人を呼び込むにはどうしたらいいか」→「②まずは自分たちが行きたいと思えばいいのではないか」→「③自分たち目線で行きたい企画を作るのが良くないか」→「④自分達って誰か」→「⑤ターゲットは岐阜大学生に絞ろう」となった。その結果、既述した「若い人に来てもらうためにはどうすればいいか提案しなさい (若い人=岐阜大学生)」といった課題になり、この課題を具体的に解決するために、パンフレット作成を行うことになった。

2. 3 課題解決策としてのパンフレット

パンフレット作成として、①現地ヒアリング、②学生アンケートを行った。①現地ヒアリングを行った理由は、現地の人には当たり前でも学生には新鮮なことがあり、地域の魅力につながると考えたからである。また、②学生アンケートを行った理由は、学生ニーズを知り、それに合わせた提案をする必要があったからである。

① 現地ヒアリング

ヒアリング内容は岐阜大学生が山県市で好きそうな場所、山県市へ来て驚く場所、山県市の中で好きな場所を現地の人に尋ねた。また、食べ物に関しては、山県市に来て初めて見たもの、山県市ならではの食べ物、味付け、食べ方などについても尋ねた。その結果、干し柿天ぷら、へぼ飯、元気玉バーガーなどがあがり、地元グルメをウリにパンフレットを作ろうとなった。

ヒアリングの対象者と日時は、(1) Y 山さんと K 子さん (2015 年 11 月 18 日, 13:00~16:00), (2) K 山さん・T 熊さん・Y 口さん (2015 年 12 月 2 日, 12:30~16:30), (3) S 田さん (2015 年 12 月 14 日, 16:30~19:30) である。

(1) Y さんと K さんのヒアリング抜粋

「K 子さんがお勧めなものは？」柿畑。柿の花がきれい。夜ライトを照らした時の柿畑の風景は最高。星もいい感じに見える。

「Y さんが好きなのは？」山の景色が大好き。この場所が好きで集落支援員をしている。子供の頃から見えてきた、当たり前の風景，人がいる集落が好き。

「山県ならではの食べ物は？」1つ目は柿。2つ目はにんにく。他には、よもぎもち、イタドリ，なつめ，という山菜，栗など。

「子供の頃遊んだのは？」キノコ狩り，虫取り，山菜取り，湖で魚釣りなど。

(2) K 山さん・T 熊さん・Y 口さんのヒアリング抜粋

「よりどころって？」他の店と被らないものを売るお店。(例：ジビエ)

「山県市で好きなのは？」夏は川で，冬は雪で遊ぶこと。他には坂でそりに乗り，下ったりできるところ。

「学生が好きそうな所は？」夏は魚釣り。日釣り券（あゆは2000円，雑魚は1500円）。放流の日はたくさん釣れる。2月末から7月までは素人でも釣りやすい。岩から飛び込みができる。ターザンロープもある。また，BBQもお勧め。

(3) S 田さんのヒアリング抜粋

「岐阜大学生が来そうな所は？」高富，美山の川。北上の川は「おんせえよお～」もあり，食べる場所もあり，近くの星空がとってもきれいでカップルにお勧め。

「S 田さん自身が好きな所は？」支所から見えるきれいな川。「おんせえよお～」も好き。「おんせえよお～」では，「大人のための中学校」のような誰もが生徒にも先生にもなれる企画を行っている。

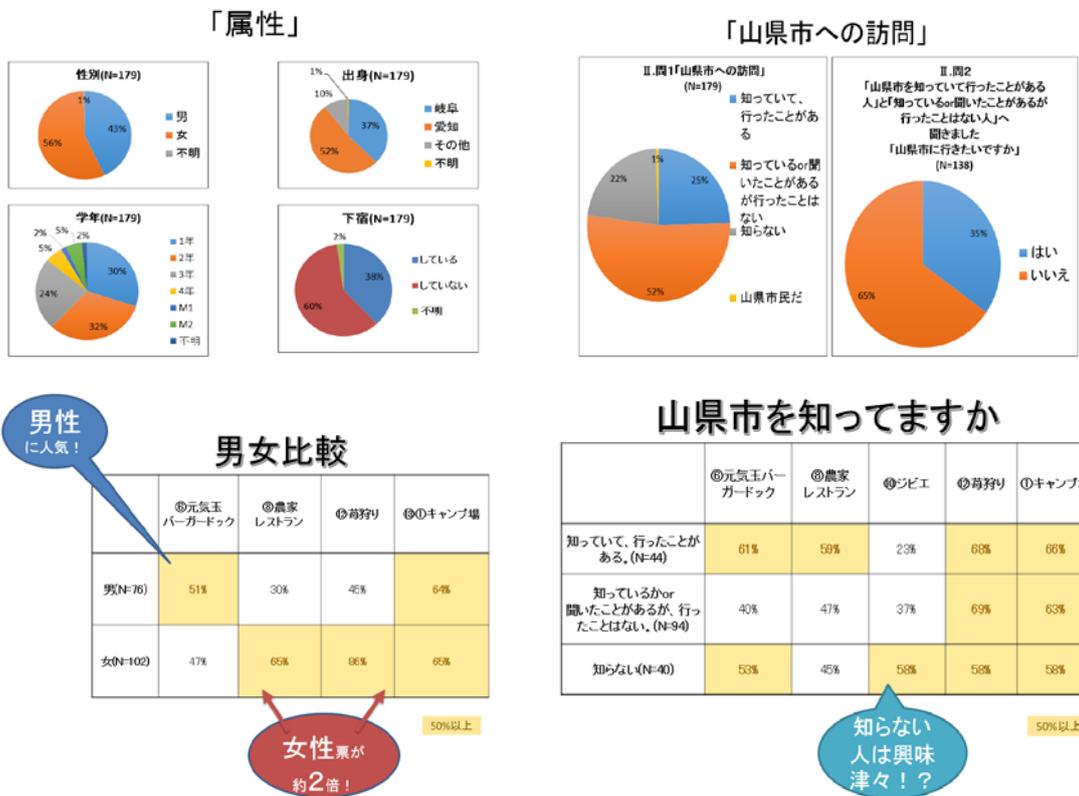
「山県市で好きな食べ物は？」「おばあがー」という，いももちの中に惣菜を挟んだ醤油が塗ってあるおやつ的な感覚で楽しめるハンバーガー。あとハヤシライス，手打ち蕎麦もおいしい。

② 学生アンケート

「岐阜県山県市の認知度についてのアンケート」と題して，学生がアンケート調査を行った。主な質問内容は，属性，学生の行動について，山県市について，クイズ，山県市への興味・関心についてである。

アンケートは，2015年12月16日13:00～14:00，2015年12月17日12:00～13:00，岐阜大学の第1食堂，第2食堂で，ランダムにピックアップした学生179人に配布し，回収した(図2参照)。

図2 岐阜県山県市の認知度に関するアンケート結果：一部抜粋



2. 4 岐阜大学生向けのパンフレット完成

現地へのヒアリングと学生アンケートにもとづき岐阜大独自のパンフレットが完成した(図3参照)。

図3 岐阜大独自のパンフレット



3. 学生と教員による2年ぶりの振り返り

2017年5月12日、16時30分～18時30分、岐阜大学において、当時1年生であった学生3人（教育、応生、地域）にヒアリングを行った。2年後にヒアリングを行った理由は、3年生になり専門分野を学ぶことで、プロジェクト型インターンシップの振り返りをして欲しかったからである。加えて、この2年後のヒアリングを踏まえて、教員自身もプロジェクト型インターンシップに関する振り返りを改めて行いたかったからである。

3. 1 学生の振り返り

学生へのヒアリング内容は、①今振り返ってみてプロジェクト型インターンシップからの気づきは何だったのか、②3年生でプロジェクト型インターンシップに参加することについてどう思うかである。

① プロジェクト型インターンシップからの気づき

当時（1年生）の学びとして、「なりたい自分になるために（地域）」、「経験すること（教育）」、「挑戦したこと（応生）」というキーワードがあった。実際、最終成果報告会では、「一歩成長した」「将来の自分を考えるきっかけになった」「アンケートが作成できた」「自主的な行動がとれた」「自分からヒアリングを行った」「自分の意見を主張した」といった内容の発表であった。

そして3年生になった現在、プロジェクト型インターンシップを振り返ってもらった結果、後述するように「発言」「逆算的な考え」「チーム」「自主的に動く」「PDCA サイクル」というキーワードがあがった。個々人によって気づきの内容は異なるものの、3人が共通して「発言」というキーワードをあげた。

たまたま「発言」というキーワードが一致したのかもしれないが、共通して発言というキーワードがあがった理由は、専門の学びに入ったことで、「発言」することの大切さを学んだからだと考えられる。専門の学びを学ぶほど、知識としてのインプットが多くなるので、発言するアウトプットの機会が減ったのではないかと考えられる。逆に言えば、それだけプロジェクト型インターンシップにおいては、専門分野の知識に依ることなく、何を発言してもよかったと考えられる。

「自分の意見を主張するのは苦手で、手を挙げて意見を言うのも苦手である。ただ、プロジェクト型インターンシップの授業は少人数だったので、自分の意見を発言していいと思えた。実際、些細なことでも発言したことで、参加者のメリットになっていた気がする。また、発言することで自分も役立っていると自信に繋がった。あと考えることが多かった。何が目的で、何をして、結果的にどうなれば成功なのか。あらゆることを考えなければならず、考える大変さはあった。（応生）」

「逆算的な考えが身に付いた。例えば、目標を教員になると置いた場合、教員採用、今から勉強しないといけないとか考えるようになった。また、積極的に発言したし、考えて発言していた。逆に、発言しないと何も始まらないし進まなかったので、絶対発言しないとイケなかった。(教育)」

「プロジェクト型インターンシップでは、自分で役割を探さなければいけなかった。どうやって自主的に動くかを自分で考えなければならなかった。また、プロジェクト型インターンシップの後に、別のプロジェクトに参加した。プロジェクト型インターンシップの経験から2年生だから発言したら駄目ではなく、ちゃんと発言して自分の考えを伝えるようにした。あと、プロジェクト型インターンシップでは、アイデアを出し、計画を立て、実際に行動し、振り返りシートを用いて振り返りをしており、PDCAサイクルを回せて、次の目標につながったと考えている。ただ、振り返りシートそのものは大変だった。(地域)」

② 3年生で参加することは可能か

3年生でプロジェクト型インターンシップに参加することについて、学部間において授業が異なるので、一概に言えないものの、地域においては、3年生でのプロジェクト型インターンシップへの参加も考えられそうである。

実際、平成27年度プロジェクト型インターンシップにおいても地域の3年生が2名参加していた。その一方で、他学部では、専門分野の授業数や課題が多いことから参加は難しいとのことであった。また、専門の知識が入るので、プロジェクト型インターンシップにおいて、自由な発言よりも専門よりの発言になり、専門のバイアスがかかるのではないかという意見もあった。

「3年では無理です。授業数が多いし、1年生だからプロジェクト型インターンシップはできた。実際、時間的な拘束が多く、授業外の時間を使うことが多く大変であった。また、1年生がよい理由として、専攻の先入観がないので、広く知見を得られるからである。(応生)」

「授業数は多くないが、課題が多く授業外でやるのが非常に多いので、3年でプロジェクト型インターンシップはやりたくない。実際、今、教育実習などもあり、指導案などを授業外で作成している。プロジェクト型インターンシップのように、自分で何かを考えることは、これ以上やりたくない。(教育)」

「今は別のインターンシップを行っているので無理だけど、それをやってなかったら問

題ないかもしれない。実際、1年生の時の反省を踏まえて行動したいし、違う社会を見たい。また、今3年生なので、就活に対しても考える時期なので、現実的な視点で社会を見れるし行動できる気がする。機会があれば、プロジェクト型インターンシップは参加したい。(地域)」

3. 2 教員の振り返り

当時、担当教員はプロジェクト型インターンシップの成果報告書に以下の内容を書いた。

プロジェクト型インターンシップにおいて重要だと考える3点をあげ結びにしたい。なぜならプロジェクト型インターンシップは、担当教員により授業のやり方が異なるからである。まず、①課題解決型授業では、学生の主体性を重視することである。そのためには、教員はもとより企業・団体も黒子に徹し教えすぎないことである。効率を重視する企業・団体の中には、結論を急ぐあまり授業に口を挟むところもある。それでは何のための課題解決の授業なのか理解に苦しむ。教員や企業・団体にとって必要なことは、学生の自主性を信じて待つことである。そして、アドバイスが必要な時に適切なタイミングで適切なアドバイスをするだけである。この按配が重要であり、そして何より難しいのが実情である。上記のことが理解できず、ただ、効率を重視し、やたらと教えたがる、ないしは、口を挟む企業・団体の参加はご遠慮願いたい。課題解決の意味がまったくないからである。次に、②単なる思い付きによるアイデアではなく、根拠や裏づけとなるデータを必ず取ること、そして、具体的解決策として次の一歩につなげることである。最後に、③課題解決のプロジェクトをやりきったという「達成感」よりも何が自分に足りなかったのかという「振り返り」を重視することである。振り返りをする事で、自身の至らなさに気付き、各自が成長するからである。

上記に掲げたポイントは、①学生の主体性を重視すること、②単なる思い付きによるアイデアではなく根拠や裏づけとなるデータを必ず取ること、③達成感よりも振り返りを重視することであった。現在もこの3つのポイントは変わっていない。

そこで以下では、今回の学生ヒアリングをもとに、①学生の主体性と③振り返りについて、改めて教員の考えを整理する。なお、②根拠を示すことについては、学生のヒアリングから何も意見がなかったので省略する。

① 学生の主体性を重視すること

主体性を重視することについて、ヒアリングから以下の内容を聞くことができた。

「最初、何をするかまったくわからなかった。だから、それを今からすることにつなげて欲しかった。例を示して欲しかった。(応生)」

「ゼロからスタートしたのでわからなかった。何をどうしていいか、最初は方向性を示して欲しかった。(教育)」

「最初、何をしたいかわからない」といった内容は、ゴールがなく方向性がないので、何をしたいかわからないということであろう。実際、課題を設定するまでに様々なアイデアや意見が出ていたものの、ゴールが見えていなかったため、自分達は何をしているのか、プロジェクトは適切な方向に向かっているのかさえ分からず、苛立ちや不安を覚えたのであろう。

この点は教員も同じであり、教員も不安であった。プロジェクトを管理するのではなく、学生に寄り添いながら学生自身のアイデアをサポートしていくことが難しく、「いつ、どのタイミングで、何を、どこまで教えるか」を常に考えなければならなかった。教員が全てをお膳立てすれば、企業や行政への最終報告も簡単に作成できるものの、これでは何のための課題解決型授業なのか分からない。学生が主体性を発揮するためには学生の成長をいかに促すかが大事であり、そのためには教員は「教えすぎず我慢し失敗も許す」ことを肝に銘じておく必要がある。

② 振り返りについて

達成感よりも振り返りを重視することについて、学生から以下の内容を聞くことができた。

「プロジェクト型インターンシップでは、アイデアを出し、計画を立て、実際に行動し、振り返りシートを用いて振り返りをしており、PDCA サイクルを回せて、次の目標につながったと考えている。ただ、振り返りシートそのものは大変だった。(地域)」

参加学生は3週間に1回の割合で、振り返りシート(A4用紙裏表1枚)に自身の気づいた内容などを書かなければならなかった。そして、この振り返りシートには教員もコメントを入れ学生に返却していた。そのため振り返りシートの作成は、学生も教員も大変であった。

実際、どれくらい効果があるかわからないものの、教員がコメントを入れて返却した方が学生の学びにつながると考えている。コメントを入れずに返却した方が効率は良いものの、教員がコメントをすることで、教員がどのようなことを考えているのかを明示できるし、学生と教員の交流を促すきっかけにもなるからである。加えて、学生は教員がちゃんと見ていることもわかるからである。

ただし、この振り返りそのものが煩わしいと考えている学生にとっては教員のコメントも煩わしいだけであろう。実際、本プロジェクトにおいても、2名ほどの学生は煩わしいと

感じていたように思える。

なお、教員がコメントした振り返りシートを返却する際には、参加学生の名前を消して返却していた。その理由は、誰が書いたかわからないようにすることで、他者がどのように考えているかを共有したかったからである。

4. おわりに

本稿は、『平成 27 年度プロジェクト型インターンシップ報告書』をもとに、現在 3 年生となった学生へのヒアリングを加筆し、まとめたものである。特に印象に残ったヒアリング内容は、プロジェクト型インターンシップの経験を活かせる次の機会が欲しかったということである。

「プロジェクト型インターンシップの後に、別のプロジェクトに参加した。別のプロジェクトに参加した理由は、プロジェクト型インターンシップの経験を活かせる『場』が欲しかったからである。(地域)」

上記の内容が印象に残った理由は、おそらく、多くの大学でもキャリア教育において同じような課題があると考えられるからである。具体的には、キャリア教育のプログラムが単発のイベントで終わっているということである。言い換えれば、それは 1 年生から 3 年生を対象としてキャリア教育（初年次教育、インターンシップなどを含む）を連動させる取り組みが十分なされていないということである。

平成 22 年の大学設置基準改正によりキャリア教育が義務化され、各大学においてキャリア科目が設置された。しかしながら私見によれば、1 年生から 3 年生を対象としたキャリア教育への取り組みが仕組みとして連動している大学は少ないようである。また、各大学におけるキャリア教育の取り組みを全体として捉える枠組みすらない。

そこで、キャリア教育の取り組みを全体として捉える枠組みの 1 つとして、Burgelman[1983]の事業創造のデザイン視点を参照に大学におけるキャリア教育への取り組みを提示する。

Burgelman[1983]の事業創造のデザイン視点をキャリア教育に援用する理由は、キャリア教育は大学における新規事業として捉えることができるからである。実際、キャリア教育は、法学、経済学、工学、医学などのように伝統的なメジャーな科目ではなく、平成 22 年の大学設置基準改正により義務化された新しいマイナーな科目である(安藤・金森[2016])。また、金森[2016]が指摘しているように、キャリア教育は学問ではなく遊びであるといった批判もある。これは新規事業や社内ベンチャーが本体の売上げと比べて少ないため軽んじられている状況と似ている。

Burgelman[1983]では、事業創造のデザイン視点における 1 つのポイントは、本業の経

営資源をどれくらい容易に新規事業に転用できるか、もう1つのポイントは新規事業にどの程度の戦略上の重要性を与えることができるかと述べている。

これらのことを踏まえると、キャリア教育における戦略的重要性は大学における就職戦略「就職率」であり、キャリア教育における業務上の関連性は授業科目の位置づけとして「学部・学科におけるコア科目との関連性」、「キャリア教員の身分（常勤・非常勤）」、「キャリア科目数」、「キャリア科目の単位数」などが考えられる。

今後は、キャリア教育における戦略的重要性、授業科目の位置づけの視点から、各大学におけるキャリア教育はどのような組織的位置づけが与えられ、どのようなキャリア教育を行い、どのような効果があるのかなどを明らかにする次第²⁾である。

【注】

1) 岐阜大学キャリア支援部門ニュース

(<https://www.orphess.gifu-u.ac.jp/career/education/centernews10.pdf>) より。参照日 2017.6.17

2) なお、金森・東淵[2017]では、Wenger et.al[2002]の実践コミュニティを援用して、正課のキャリア教育と正課外のキャリア教育の統合を試みている。実際、キャリア教育は各大学の実情に応じて異なる。例えば、キャリア教育を就職指導、ないしはSPI対策の授業としている大学もある。しかしながら、キャリア教育そのものは単なる就職指導やビジネスマナーではなく、学生個人が「社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」である。そして、この学生の必要な基盤となる能力や態度を育てるには、各大学における「構造の違い」を踏まえキャリア教育を行うだけでなく、知識を生み出す社会的枠組みである「実践コミュニティ」の観点からもキャリア教育を行う必要がある。

【参考文献】

安藤りか・金森敏、「キャリア教育を担当する大学教員の専門性とは何か一対話的自己エスノグラフィーを用いた検討」、2016年9月、pp121-pp124。『日本キャリアデザイン学会第13回研究大会発表要旨集』。

Burgelman, R.A(1983), "A Process Model of Internal Corporate Venturing in the Diversified Major Firm", *Administrative Science Quarterly* 28, pp223-244.

岐阜大学教育推進・学生支援機構 (2016), 『平成27年度プロジェクト型インターンシップ報告書』。

金森敏 (2016), 「PBLに参加する学生の心構えとキャリア教育の効果について：4つの事例を中心に」、『岐阜大学教育推進・学生支援機構年報』第2号, pp98-111。

金森敏・東淵則之 (2017), 「授業外における学びのコミュニティの生成・維持に関する研究：キャリア教育の学びを中心として」、pp93-96。『日本キャリアデザイン学会第14回研究大会発表要旨集』。